

氏名	くろ みや かず もと 黒 宮 一 太
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 305 号
学位授与の日付	平成 18 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 環 境 相 関 研 究 専 攻
学位論文題目	ネーションとの再会

(主 査)
論文調査委員 教授 佐伯啓思 教授 道 簀 泰 三 助教授 大 澤 真 幸

論 文 内 容 の 要 旨

本博士学位申請論文は、近年の欧米におけるナショナリズム研究を踏まえ、その問題点を指摘すると同時に、ナショナリズム論の新たな可能性を追求するものである。第二次大戦を契機として開始されたナショナリズム研究は、ヨーロッパを脅威に陥れた全体主義の断罪と封じ込めという課題のもとに、ハンス・コーンの提示した「西欧型」と「東欧型」という「コーン・ダイコトミー（二分法）」に始まった。これは後にナショナリズムの「シヴィック／エスニック二分法」と言い換えられ、ナショナリズム論の中心をなしてきた。つまり、民族的出自や文化的背景、宗教的信条の差異を問われることなく、リベラルな価値や共通の法、民主的な政治体制の共同化によって国民的結合をとく「シヴィック」な原理と、諸個人の意志とは無関係に、その個人の出生において深く規定された血統を重要な要素とする「エスニック」な原理の間の二分法であり、これはおおよそヨーロッパにおける西欧型ナショナリズムと東欧型ナショナリズムに置き換え可能とされてきた。その上で、戦後の国民形成においては、「エスニック」な原理の危険性が強く指摘され、「シヴィック」な原理をもってリベラル・デモクラシーの観点から道徳的に許容できるものとみなされてきた。

この二分法的で二者択一的思考は、また、ナショナリズム研究における近代主義と原初主義の二元論的対比とも関わっている。今日特に影響力の強い近代主義においては、たとえばアーネスト・ゲルナーが主張するように、ナショナリズムは、近代化や産業化に伴う国民教育や生活の標準化の要請によって作り出されたものと説明される。だがその際にも、近代化とともに人々は伝統的・土着的な共同体から解放され、血に基づく民族性の原理からは自由になる、という考えが前提となっている。

しかし、世界的規模で近代化が進められ、またグローバル化が進展する今日、再び民族主義が興隆し、原理主義が登場し、各国の文化的独自性に対する意識が高まるという逆説的な現実が見られる。だがそれは従来のナショナリズム研究の中心である「シヴィック／エスニック二分法」や「近代主義」によってはうまく説明されない。そこで、本論文においては、リベラル・デモクラシー対全体主義という図式のもとに戦後ナショナリズム研究において支配的であった「シヴィック／エスニック二分法」に対して批判的検討が加えられ、今日のナショナリズムの根底にある問題を、「帰属＝根を持つこと」という実存的概念に求めることで、新たなナショナリズム論が提示されている。

本論文の第一章では、問題意識を明確にするために、ハンナ・アレントのナショナリズム論が取り上げられる。全体主義批判の文脈のなかで、しばしば「種族的ナショナリズム」批判を展開したとされるアレントのナショナリズム論の検討を通じて、申請者は、従来あまり言及されることのなかった「ナショナリズムの初期の伝統」の概念に注目する。その上で、アレントが「故郷喪失」の状況のなかで、「土地への根づき」による「共同性」の確保を模索していた点に、「シヴィック／エスニック二分法」を乗り越える可能性を見出す。

第二章では、欧米において近年展開されている「新しいナショナリズム論」というべき「リベラル・ナショナリズム論」が主要な検討対象となっている。申請者はまず、イグナティエフ、キムリッカ、テイラー、ミラーなどの近年のナショナリ

ズム論と文化的多様性の関係に関する議論を検討する。その上で、リベラリズムとナショナリズムの調停を図ろうとする「リベラル・ナショナリズム」が、結局、西欧啓蒙主義のリベラリズムの政治体制の共有という前提においてしか妥当せず、「シヴィック／エスニック二分法」を乗り越えるものではなく、またアレントの提起した「帰属」や「共同性」の問題に答えるものでもないことを明らかにする。

第三章では、再度アレントに立ち返り、アメリカ革命を論じる文脈で提起されたアレントの「政治的空間」や「公共性」の議論を検討する。アレントは、一方で「共和国の創設」に高度な政治的公共性の創造と人間の自由を見たが、同時に、たとえば独立後のアメリカに、その革命精神の衰退を見た。申請者は、その議論を手がかりに、革命精神を持続させるための、共同体（国家）の「共通の関心」、および複数者によって開示される「共同の世界」の持続的存在の必要性を主張する。

第四章では、持続的に存在する「共同の世界」の内実を明らかにするために、アレントのユダヤ人論が取り上げられ「自覚的パリア」の概念が取り出される。アレントの「故郷喪失者」と「自覚的パリア」の概念の検討を通じて、申請者は、他者との共同の企てとして作り出された「歴史的経験の共有集団」としてのネーションの観念を改めて提示する。ここで提起されたネーションの観念は、「シヴィック／エスニック二分法」から一線を画す近年のアンソニー・スミスのナショナリズム論とも通底するものである。さらに申請者の主張は、近代社会の「実存的な不安」を抱えた現代人がもつ「故郷喪失状況」を認めた上で、特定のエスニー共同体への自明な帰属を前提としない、自覚的に選び取られる共通の「記憶への帰属」に、今日のネーションの可能性が求められるとする。

このように、本論文においては、アレントが提示した「帰属」や「根づき」という課題に対して、近年のナショナリズム研究の批判的な検討を踏まえた上で、独自の回答を与えようと試みている。それは、シヴィックな原理とエスニックな原理の二者択一的な二分法には還元されないもので、そのヒントを申請者はアレントの自覚的パリア論に求め、血や大地ではなく、共通の歴史的記憶への自覚的な帰属だと述べる。

論文審査の結果の要旨

本博士学位申請論文は、ナショナリズム研究において独自の意味と重要性をもつものである。戦後の日本の社会科学や社会思想の分野においては、ナショナリズム論の重要性は認識されてはいても、その本格的な研究はほとんどなされていない。その基本的な理由は、戦後日本の知的世界においては、ナショナリズムは、自由や民主主義の対立概念と理解され、常にそのイデオロギー性が問題視されてきたためである。その結果、ナショナリズムを主題化すること自体が、イデオロギー的な文脈に組み込まれて論議の対象とされてきた。

これに対して、欧米、特に英米においては、この十数年の間に、ナショナリズムは社会科学や社会哲学の重要な研究テーマとして確立し、近年の世界的な民族主義の復興とともに、社会学者、歴史学者、政治学者、地域研究者などを巻き込んだ研究分野となっている。さらに、近年の欧米におけるナショナリズム研究は、そのイデオロギー批判の段階を脱し、むしろ、批判にもかかわらずナショナリズムが存在するという現実の直視から出発している。リベラル・ナショナリズム論やシヴィック・ナショナリズム論のように、ナショナリズムを積極的にリベラリズムと結合させる試みも出現している。

しかし、このような欧米のナショナリズム研究は、日本においては、まだ十分に紹介されているとはいえ、まして、それらの検討の上になった学問的研究としてのナショナリズム論は皆無に近い。したがって、近年の欧米のナショナリズム研究の紹介・検討でさえも、この分野においては十分に有意義なことであるが、本論文は、これらの近年の欧米のナショナリズム論を渉猟した上で、独特のナショナリズム論を提示しようと試みている。その意義を次の三つの点において評価したい。

第一に、戦後の社会科学におけるナショナリズム論は、第二次大戦をリベラル・デモクラシーと全体主義（ファシズム）の戦いと位置づけ、ナショナリズムを全体主義と結びつけて理解してきた。そのために、ナショナリズムに対する否定的態度が優勢にたち、それをリベラリズムやデモクラシーと対立させてきた。しかし、それでは近年のグローバル化のなかにおけるナショナリズムの復活や民族意識の高まりは容易には捉えられない。

このような戦後の社会科学的な視点に対して、申請者は、ハンナ・アレントに依拠しつつ、近代社会の特質である「故郷喪失」状況を現代大衆社会に重ね合わせ、その中における無国籍性のもつ不安を背景に、「根づくこと」としての集団的帰属を引き出そうとする。このいくぶん、ハイデッガー的な存在の不安という実存的観念を含んだ社会哲学的視点は、従来の

リベラリズム系の社会科学には欠落していた問題意識であり、ナショナリズムの問題に、実存的な不安という社会哲学的観点を持ち込んだことがこの論文のもっとも重要な意義である。

第二に、ナショナリズム研究の文脈で言えば、これまでの多くの研究が依拠してきた「シヴィック／エスニック二分法」パラダイムを乗り越える試みがなされていることは高く評価されるべきである。また、近年のナショナリズム研究の主要潮流である、ゲルナー流の近代主義や、リベラル・ナショナリズム論の批判的検討がなされ、それを踏まえうえでの独自のナショナリズム論の構想が展開されている。また、英国のナショナリズム研究のひとつのスタンダードであるアンソニー・スミスを申請者は重要なレファレンスとし、さらにその「ナショナリズムの民族的起源」という論点についての修正を加えている。

第三に、申請者の独自の視点を提出する上で、ハンナ・アレントのナショナリズム論、ユダヤ人論、公共性論、共和制論などが仔細な検討の対象とされ、「自覚的パリア」というアレントの視点を独自に読み込み、「シヴィック／エスニック二分法」や近代主義を乗り越える鍵概念としている。アレント研究は近年著しい成果を生み出しているが、アレントのナショナリズム論をまとめて論じた研究はほとんど存在せず、アレントのもつネーションやナショナリズムに対する複雑でアンビバレントな態度を理解するという点においても、解釈上の独自で重要な論点を提出している。

このように、本論文は、わが国ではさきわめて手薄であり、むしろ学問的对象として忌避されてきたナショナリズム研究においてパイオニア的な役割を果たすものであり、独自の意味をもつものである。アンダーソンの『想像の共同体』とゲルナーの『国民とナショナリズム』が出版された1983年はナショナリズム研究において画期をなす年とされている。申請者はそれ以降の英米のナショナリズム論を丹念に追跡しており、その慎重で丁寧な議論の進め方には、往々にしてイデオロギー的な文脈にとらわれてしまう危険性を伴うこの主題に対する誠実な姿勢があらわれている。

今日、世界中でナショナリズムは重要な現象となっており、わが国でもこの問題についての一般的な関心も高まっている。また、同時に、この研究は、政治学、社会学、思想史といった特定の分野には収まらない広がり、現代社会における中心的な重要性をもっている。その中で、本論文は、ネーションやナショナリズムの意味理解において基本的な視点を指し示すものといえよう。また、往々にしてイデオロギー対立に陥りがちなこのテーマについての、学問的な意味での本格的な基礎的文献になるものと思われる。社会科学や社会哲学を相関させ、総合化することによって現代社会の環境としての観念的枠組みを論じる本論文は、環境関連研究専攻、社会環境システム論講座にも相応しいものである。

よって

本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年9月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。